

魏志倭人伝を読む 【邪馬台国はどこにあった?!】



本文から・・・

魏志倭人伝の読み方はのポイントは、

- ・魏（中国）側から来た（使者）人が見た倭（日本）の姿であると考え。
 - ・行ったところは、必ず「方角と里程及びどのように行ったか」が書かれています。
- 具体的には「東南陸行、五百里、伊都国に到る」・「始めて一海を渡る、千余里対海国に至る」
「東行、不弥国に至ること百里」・・・など。

魏志倭人伝を読む【邪馬台国はどこにあった?!】

目次

1 魏志倭人伝を読む【邪馬台国はどこにあった?!】	－1
①そもそも魏志倭人伝とはどんなもの??	－1
②魏志倭人伝という書物があるわけではない	－1
③いつ誰が書いたのか	－1
④いつの時代の倭（日本）が書かれているのか	－2
⑤当時の倭（日本）の状況	－2
2 邪馬台国までの道のり	－3
3 国名の「邪馬台国」について	－5
4 風俗習慣について	－6
5 邪馬台国はどこにあったのか	－7
①北部九州説	－7
②畿内説（近畿地方説）	－8
6 女王（国）の境界	－8
7 まとめ	－10
・資料編	－12
・魏志倭人伝（読み下し文）	－13
・あとがき	－17
・参考資料	－18

1. 魏志倭人伝を読む【邪馬台国はどこにあった?!】

邪馬台国（やまたいこく）がどこにあったかということは長いこと議論されています。現在、北部九州説と畿内説（近畿地方説）が有力ですが、その論争のもとになっているのが魏志倭人伝（ぎしわじんでん）での邪馬台国についての文章です。

①そもそも魏志倭人伝とはどんなもの??

「魏志（ぎし）」とは中国にあった魏（ぎ）という国の歴史書（正史）のことです。

「倭人（わじん）」とは倭（わ）の国の人、つまり昔の日本人です。

簡単に言うと「魏の歴史書にある日本人についての記録」ということです。

ここで単純な疑問・・・なんで外国の人が書いた歴史書を頼るのでしょうか？

倭（日本）の人が自分で書いたものを見れば一番正確なのではと思ってしまいます。

日本最古と云われている「古事記・日本書紀等」には、邪馬台国や卑弥呼は一切出てきません。それで、外国の記録を頼りにするしかないんです。

②魏志倭人伝という書物があるわけではない

魏志倭人伝という書物があるのかと思ってしまいますが、実はそうではありません。

魏志倭人伝は「三国志（魏・呉・蜀）」の中の「魏書」のさらにその中の第三十巻「烏丸・鮮卑・東夷伝」に書かれている「倭人条」の呼び名です。

倭国伝ではありません。



↓ 図にするとこんな感じです。

つまり、魏志倭人伝は中国の正史と云われている三国志六十五巻のほんの一部に書かれた文章のことなのです。

文字数は約 2000 字程度しかありません。

つまり、倭（日本）のことだけを調べて書かれたもの

ではないのです。このことは魏志倭人伝を読む上で知っておかなければなりません。

③いつ誰が書いたのか

三国志は 3 世紀末の 280 年～290 年代に書かれていますので、魏志倭人伝もその時期に書かれたものです。

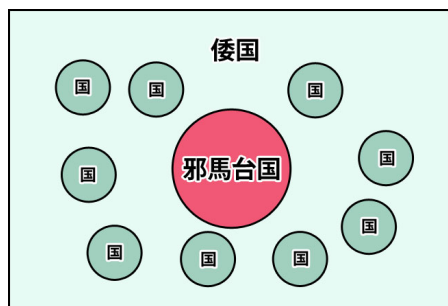
陳寿という官僚が、実際に倭（日本）に行った人（使者）の話を聞き、それをまとめて記していると考えられます。

魏志倭人伝の中には「〇〇（当時中国にあった地名）に似ている」とか「（中国における）〇〇のような風習である」というような文章がいくつかあります。そのことから、魏（中国）側から来た人（使者）が見た倭（日本）の姿であると考えられます。

④いつの時代の倭（日本）が書かれているのか

魏志倭人伝には「景初2年」などの年号が出てきます。これは西暦238年のことです。魏志倭人伝は280年～290年代に書かれていますので、書かれたときから40～50年ほど前の倭（日本）のことを書いています。かなり近い時代のことを書いているので、そういう意味では信ぴょう性が高いのではないかと考えられています。そのため、魏志倭人伝は邪馬台国研究で重要な材料として取り上げられています。

⑤当時の倭（日本）の状況



魏志倭人伝に書かれている時代の倭（日本）は↓こんな状況でした。

▲ 倭国という大きなくくりの中に、30の国があると書かれています。里程から考えると今の県のような小さな単位で国があったと思われます。

そして、その中に卑弥呼を女王とする邪馬台国がありました。一般に、卑弥呼が女王になる前までは争いが

ずっと続いていて、各国が卑弥呼を倭国の女王にたてて認めてからは争いがなくなったと言われています。

しかし、魏志倭人伝にははっきりと卑弥呼が女王になったことで争いがなくなったとは書かれておらず、「争いが続いていた」ともとれ仲裁？のため「塞曹掾史張政等を遣わし」たと魏志倭人伝に書かれています。

魏志倭人伝には邪馬台国が、はるか遠くの魏に貢物（みつぎもの）を送り、これを喜んだ魏の皇帝は卑弥呼を倭（日本）の王だと認定する「親魏倭王（しんぎわおう）」の称号を送ったとも書かれています。わざわざ魏から称号をもらわなければいけない状況（三国対立と朝鮮半島情勢）と、国内では、やはり卑弥呼を女王とすることを不満に思う人たちがいて争いがおきていたのでしょうか。魏志倭人伝には「“倭の女王卑弥呼、狗奴國の男王卑弥弓呼と素より和せず。”と書かれています。

ただ、魏志倭人伝には邪馬台国以外の国はどの国も「家が数千戸である」と書かれているのに、邪馬台国は「七万戸の家がある」と書かれていますので、かなり大きな力と権力を持った国であったことは間違いないようです。

では実際に書かれている邪馬台国までの道のりを見てみましょう。

2. 邪馬台国までの道のり（通説と別説を併記しました）

- ・ 里程とルートは下記を参考にしました。

（20150225 発行: 図説 日本史通覧、株式会社帝国書院、監修：黒田日出男）

魏志倭人伝には邪馬台国までの道のりが書かれています。〇〇国があって、その南に〇〇国があって・・・と里程と方角が順をおって書かれていて、その国ごとの特徴・どれぐらいの戸数の家があるかなども書かれています。

- ・ “倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝貢する者あり、今、使譯通ずる所三十國。”
- ・ “郡より倭に至るには、海岸に循ひて水行し、韓國を歴るに乍ち南し乍ち東し、その北岸狗邪韓國に至る七千余里。”

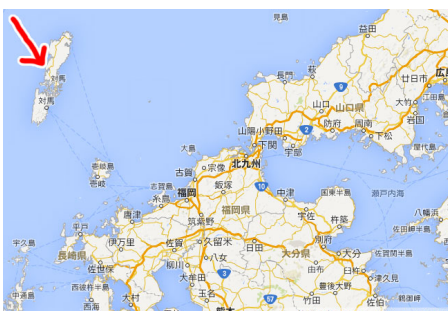
まず「倭（日本）は東南大海の中にあり、山島の中に国があって漢の時朝貢するものあり」、その時は百余国あったが、今、やってきたのは三十国であると書かれています。東南の島と言うとこれは九州又は四国のような印象です。

（当時、本州は島かどうかわかりませんでした。）

そして、倭（日本）に行くには帯方郡からは海岸に沿って「水行」し、韓国に入ると陸路で南へ行ったり東へ行ったりして「狗邪韓国（くやかんこく）」（倭の北岸と書かれています。）まで、七千余里あったと書かれています。「狗邪韓国（くやかんこく）」まで倭国なのでしょうか。

そこからから海を渡ると書かれています。これは名前から判断して現在の韓国の南端でしょうか。

- ・ “始めて一海を度る、千余里、対海國に至る。”



▲ そこからはじめて海を渡る千余里で「対海国（対馬国）」に着くと書かれています。「方四百余里」の島とあります。これはもちろん対馬ですね。

「注：対海国・・・中華書局標点本は、現在の地名の「対馬国」としています。」

- “又、南、一海を渡る、千余里、名づけて瀚海と曰う。一大國に至る。”



▲ そして又海を渡ると千余里で「一大国」です。
「方三百里」の島とあります。
これは壱岐島で間違いのないでしょう。

- “又、一海を渡る、千余里、末盧國に至る。”



▲ さらに又海を渡ると千余里で「末盧国（まつろこく、もしくは まつらこく）」です。これは佐賀県北部の松浦半島の周辺だと考えられています。

- “東南陸行、五百里、伊都國に到る。”



▲ 陸路を東南に行くと五百里で「伊都国（いとかく）」に着いたとあります。
これは現在の福岡県糸島市周辺だと考えられています。
糸島市ではたくさんの遺跡も見つかっています。

- “東南奴國に至ること百里。”



▲ そこからさらに東南には「奴国（なこく）」があります。これは現在の福岡県北部地方だと考えられています。春日市などでは3世紀頃の遺跡がたくさん見つかっています。また、（通説では）「那の津」や「那珂川」など「な」という地名からもその可能性は高いと考えられています。

「注：（別説では）そこから「東南の「奴国（なこく）」に至るには百里」と書いてありますが、行ったとは書いてありません。これまでのように「陸行」又は「水行」で

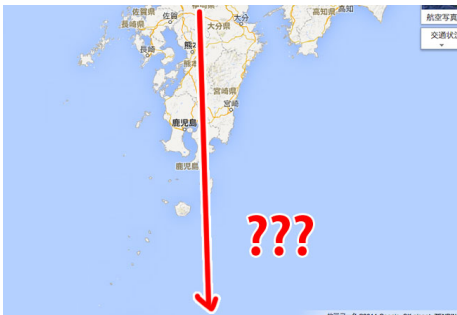
「行く」とはありません。ですから「奴国（なこく）」には行かずに次は「不弥国（ふみこく）」です。」

• 東行、不彌國に至ること百里。



▲ そこから東に行くと百里で「不弥国（ふみこく）」です。これは現在の福岡県宇美（うみ）町ではないかと考えられていますが、名前がちょっと似ていること以外の証拠はないようです。通説では、このあたりからだんだん あやしくなっていくます。

• “南、投馬國に至ること、水行二十日。”



▲ 通説では、次の「投馬国（とうまこく）」で完全にわからなくなってしまいます。というのも、「南、投馬国に至ること水行二十日」と書かれているのです。宇美町は内陸部にありますし、大きな川也没有なので「水路」とどうしても結びつかないのです。もし強引に水路を20日進むとしたら、鹿児島よりはるか南の海の上ということになります。で南の投馬国

へ行くには、水行二十日と読みます。やはり海上ですか。

「注：（別説では）これもそこから南の「投馬国（とうまこく）」に至るには水行二十日と書いてありますが、行ったとは書いてありません。これまでのよう「陸行」又は「水行」で「行く」とはありません。南行すると書いてありません。（南の方角）に「投馬国（とうまこく）」があり水行二十日の距離と説明しています。ですから「投馬国（とうまこく）」には行かずに次は「邪馬壹国（やまいちこく）」です。」

3. 国名の「邪馬台国」について



現在（過去も）出版本及びネットで提供されている魏志倭人伝には「邪馬壹国（やまいちこく）」と書かれていて「邪馬台国（やまたいこく）」とは書かれていません。なぜか「邪馬壹国を（やまたいこく又はやまこく）」と読んでいるんですね。ですから邪馬台国と書いてある「原本」はないんですね。

通説を続けます。で、結局邪馬台国はどこ・・・？

▲そして（通説では）次がいよいよ邪馬台国なのですが、さらに謎な展開に！なんと、そこからさらに南に水路を十日、陸路を一ヶ月と書かれているのです！！

4. 風俗習慣について

ところで、魏志倭人伝には当時の倭（日本）の人々がどんな様子だったかも記されています。ちょっと話はそれますが、ついでなので日本にはどのような人たちが住んでいたのかを見てみましょう。

・服装・身なり食べ物

・男性は、偉い人も民衆もみんな顔や体に刺青（いれずみ）をしている。その刺青（いれずみ）は階級によって入れる場所や大きさが違う。刺青（いれずみ）はおまじないの意味もある。

- ・男性は。はちまきをつけて布を体に巻いている。
- ・女性は、真ん中に穴の空いた布に頭を入れた服を着ている。
- ・みんな裸足で生活している。
- ・身体に朱丹を塗る。
- ・矛（ほこ）、楯（たて）、木でできた弓を使っている。

・食べ物

- ・海に潜って魚や貝をとっている。
- ・一年中生野菜を食べている。
- ・竹や木でできた器に入れた食べ物を手で食べている。

・風習

・人が死ぬと土を盛って塚を作る。その後十日間ほどは肉を食べない。遺族の代表は泣き明かし、それ以外の人はお酒を飲んで歌い、踊る。葬った後は家族で禊（みそぎ＝川や海の水で体を清める）をする。

・中国に使者を送るときには持衰（じさい）を立てる。持衰は体を洗ったりせず、肉も食べず、婦人を近づけず、という状態にさせる。使者の旅がうまくいけばご褒美を与えるけれども、暴風雨などで旅がうまくいかなかったら殺されてしまう。

・倭人は、百歳（平均八十～九十歳）ぐらいまで生きる

・偉い人（大人）は4～5人の奥さんがいる。偉い人でなくても（下戸）2～3人の奥さんのいる者もいる。でもヤキモチやきではない。

・盗みなどの犯罪は少ない。軽い犯罪の場合は家族が奴隷にされてしまう。重い犯罪の場合は家族が滅ぼされ、親戚にも影響がある。

その他にも真珠が採れることや、占いをしていることなど色々と特徴が書かれています。

5. さて、話を戻します。邪馬台国はどこにあったのかを再び考えてみます。

邪馬台国の場所については北部九州説と畿内説（近畿地方説）の2つがあります。それぞれの主張はこんな感じです。



①北部九州説

（通説では）

- ・魏志倭人伝に書かれているものに似た特徴の棺がたくさん見つかった。
- ・「水路を二十日」「水路を十日、陸路を一月」という表現はスタート地点（韓国ソウルあたり）からの合計距離であると考えないと矛盾しない。
- ・「末盧国（まつろこく、もしくは まつらこく）」「伊都国（いとこく）」「奴国（なこく）」などはほぼ間違いなく九州にあった国なので、邪馬台国もこの付近にあったはず。

魏志倭人伝のつづきは、こう考えます。・“郡より女王國に至る、萬二千余里。”

▲（別説であ）東南の「奴国（なこく）」に至るには百里と書いてありますが、行ったとは書いてありません。東南には「奴国（なこく）」がありますと考えます。

▲結論は、「不弥国（ふみこく）」の南（隣接）が、邪馬台国で女王の都する所です。郡より萬二千余里あります。（郡から 水行十日・陸行一月かかります）。

ポイントは、

- ①魏（中国）側から来た（使者）人が見た倭（日本）の姿であると考えられます。
- ②行ったところは、必ず「方角と里程及びどのように行ったか」が書かれています。
具体的には「東南陸行、五百里、伊都国に到る」・「始めて一海を渡る、千余里対海国に至る」・「東行、不弥国に至ること百里」・・・など。

②畿内説（近畿地方説）

- ・魏志倭人伝に倭の女王に 100 枚の銅鏡をプレゼントしたと書かれていて、近畿地方では九州よりも多い数の大量の銅鏡が見つかった。
（でも三角縁神獣鏡は全国で 500 面以上出土あり今では疑問視されています。）
- ・魏志倭人伝に書かれている方角に誤りがあり、水路を南に二十日を東に二十日に訂正すると、ちょうど瀬戸内海を通るようなルートになり、合致する。
- ・邪馬台国が、近畿地方に 4 世紀頃に登場する大和朝廷とつながっていると考えると自然である。「ヤマトイ」と「ヤマト」も似ている。
（しかし魏志倭人伝どこにも「やまたい」とは書いてないです。「やまいち」と書いてあります。タイとトは意味は全く違います。）
- ・「注：畿内説は」魏志倭人伝や版木・版本など、残っている全ての物が方角だけ間違っているという説です。（しかし方角がでたらめでは目的地に着かないのではないのでしょうか？）
- ・「注：畿内説は」「①方角と②里程（尺度）と③目的地名の三つが、間違っているということが前提」となっています。倭人伝だけ間違っているのでしょうか？

6. 女王（国）の境界

ではちょっとここで魏志倭人伝の中で気になる文章をピックアップしてみたいと思います。（※文章は「魏志倭人伝 | 邪馬台国の会」より引用しています）

- つぎに斯馬国（しまこく）がある。つぎに已百支国（いわきこく）がある。
- つぎに伊邪国（いやこく）がある。つぎに都支国（ときこく）がある。
- つぎに弥奴国（みなこく）がある。つぎに好古都国（をかだこく）がある。
- つぎに不呼国（ふここく）がある。つぎに姐奴国（さなこく）がある。
- つぎに対蘇国（とすこく）がある。つぎに蘇奴国（さがなこく）がある。
- つぎに呼邑国（おぎこく）がある。つぎに華奴蘇奴国（かなさきなこく）がある。
- つぎに鬼国（きこく）がある。つぎに為吾国（いごこく）がある。
- つぎに鬼奴国（きなこく）がある。つぎに邪馬国（やまこく）がある。

つぎに躬臣国（くじこく）がある。つぎに巴利国（はりこく）がある。
つぎに支惟国（きくこく）がある。つぎに烏奴国（あなこく）がある。
つぎに奴国（なこく）がある。これは、女王の境界のつきるところである。

▲ 邪馬台国から奴国（なこく）に至るまでの国を順番に書いたものです。奴国（なこく）で女王（国）の境界がつきると書かれています。ここではおそらく女王＝倭（わ）という意味で書かれていると思われます。

一大国（いちだいこく）や末盧国（まつろこく、もしくは まつらこく）、伊都国（いとこく）などは現在でいうところの市町村ぐらいの大きさと考えられます。なので、ここに並べられている国も市町村ぐらいの大きさのものだと思われます。

もし近畿地方から市町村ぐらいの大きさを並べていったら、100 個ぐらいの数が必要になるはずですが、魏志倭人伝の文章では邪馬台国から奴国（なこく）までが20 個ぐらいの国で収まっています。

そもそも、魏志倭人伝には30 個の国が倭（日本）の中にあつたと書かれていますが、市町村ぐらいの大きさの国が30 個だとしたら北部九州ぐらいで収まってしまいます。



「境界のつきるところ」ということは、

▲ もう一度 奴国（なこく）の場所を確認してみましょう。奴国（なこく）は福岡県北部でほぼ間違いのないと考えられています。漢委奴国王印（金印）も福岡の志賀島から出土しています。「境界のつきるところ」ということは、



▲ こういう感じで南からや東から国を並べていくと奴国（なこく）で「境界がつかえる」並びにすることができますね。

奴国（なこく）の西側には伊都国（いとこく）や末盧国（まつろこく、もしくは まつらこく）がありますし、北側は海ですので南～東の方角から順番に書いていると思われます。

▲ そして、こちらの文章。

“女王国より以北には、とくに一大率(ひとりの身分の高い統率者)をおいて、諸国を檢察させている。諸国はこれを恐れ憚っている。

(一大率は)つねに伊都国に(おいて)治めている。国中において、(その権勢は中国の)刺史(郡国の政績、状況を報告する官吏。州の長官をさすばあいもある)のごとき(もの)である。 “

難しく書かれていますが、要約すると、「女王国（これは邪馬台国の意味だと思われます）より北側の国は伊都国から派遣された調査員が各国を監視している」という内容のようです。



▲ もし近畿地方に邪馬台国があったとするとこんな感じになります。これだと、どうしても違和感を感じます。すぐ近くの奴国（なこく）や末盧国（まつろこく、もしくは まつらこく）は伊都国（いとこく）の調査員が監視をしていないということになってしまいます。



▲ もしこのレイアウトだとしたら自然だと思います。
“女王国の東(方)に、千余里を渡海すると、
また国がある。みな倭 種である。 “

▲ 次にこちら。女王国（これは邪馬台国の意味だと思われます）の東に海を渡ると、そこにも倭（わ）の人が住む場所があると書かれています。

もし九州だとしたら海をわたるとまた中国地方や四国があるので倭（わ）の人が住む場所があるというのは自然です。近畿地方は東の方までずっと陸続きです。

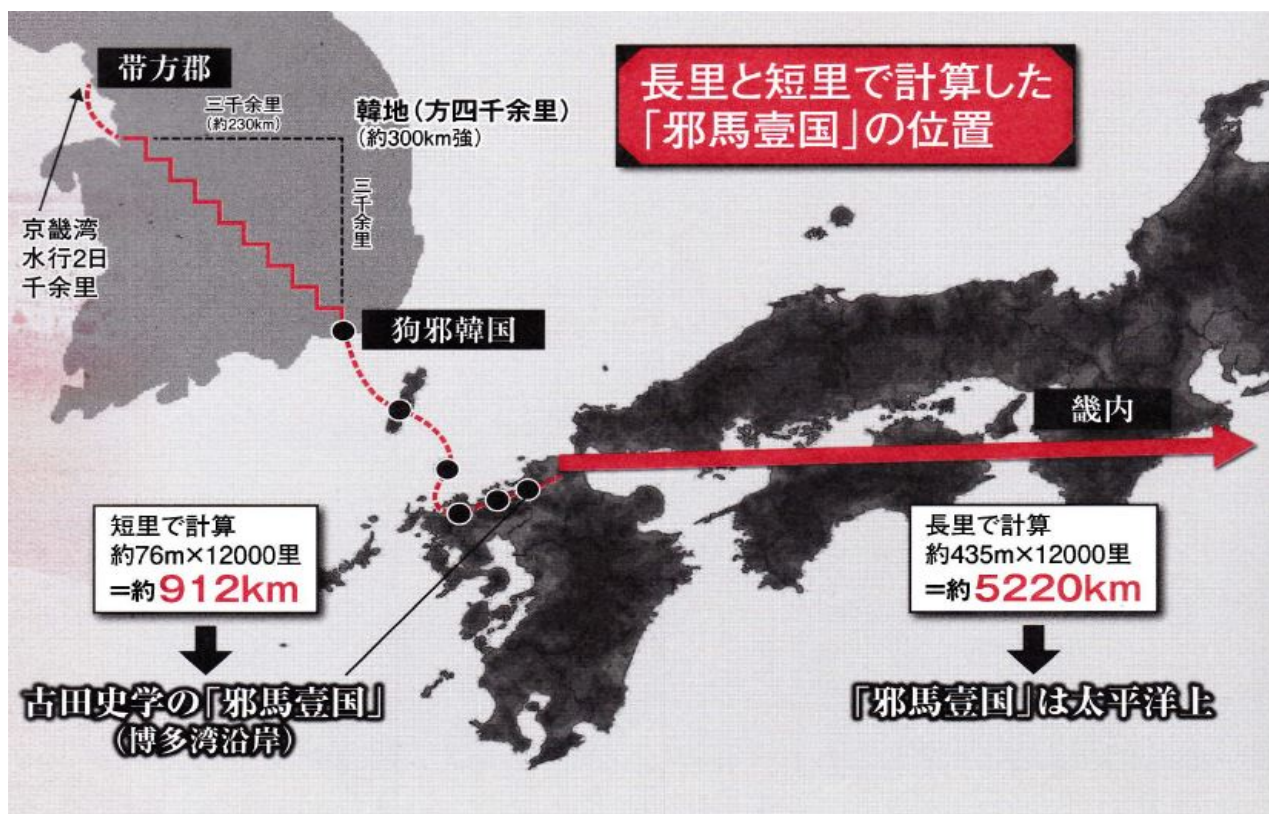
7. まとめ

結論：女王国は、北部九州及び糸島博多湾岸付近

▲ 「不弥国（ふみこく）」の南（里程が書いてないので隣接しています。）が、邪馬壹国（原文）で女王の都する所です。郡から水行十日・陸行一月の行程です。里程は、郡より萬二千余里となり。（内訳は、狗邪韓国まで7000里+海1000里+島内800里+海1000里+島内600里+海1000里+伊都国まで500里+不弥国まで100里=12000里です。）

ポイントは、以下のとおり。

- ①魏（中国）側から来た（使者の報告）人が見た倭（日本）の姿であると考えられます。
- ②行ったところは、必ず「方角と里程及びどのように行ったか」が書かれています。
 具体的には「東南陸行、五百里、伊都国に到る」・「始めて一海を渡る、千余里対海国に至る」・「東行、不弥国に至ること百里」・・・など。
- ③里程について考えてみます。通説では暗黙のうちに一里は約435メートルと考えていますが、これは無茶です。「狗邪韓国（くやかんこく）」の北岸で七千余里と書いてありますので、尺度が違ふと考えるのが道理だと思います。
- ④「狗邪韓国（くやかんこく）」（倭の北岸まで、）七千余里ですので、12000里－7000里となり残りの里程は5000里です。とても近畿までは行けません。九州博多湾付近です。
- ⑤さらに近畿までもって行くには、魏志倭人伝を読むのに前提条件を設定する必要があります。「方角と里程と目的地名」それぞれが間違っていなければなりません。
- ・南は東の間違い。
 - ・一里は実際より誇張されているのであてにならない。
 - ・「邪馬壹国（やまいち）」は、邪馬台国（やまたい又はやまと）の間違い、
- ⑥三国志は、中国の正史です。相手国の名前や方角が間違っている。また使っている距離がでたらめに記述されている。と本当に言えるのでしょうか。
- ・上記を検証して、三国志（魏志倭人伝）は正確だという本も出版されています。
- 以上が今考えられる結論です。



資料編として、以下に現在の九州説と近畿説の魏志倭人伝の解釈ポイントと魏志倭人伝全文及び参考資料を列記します。

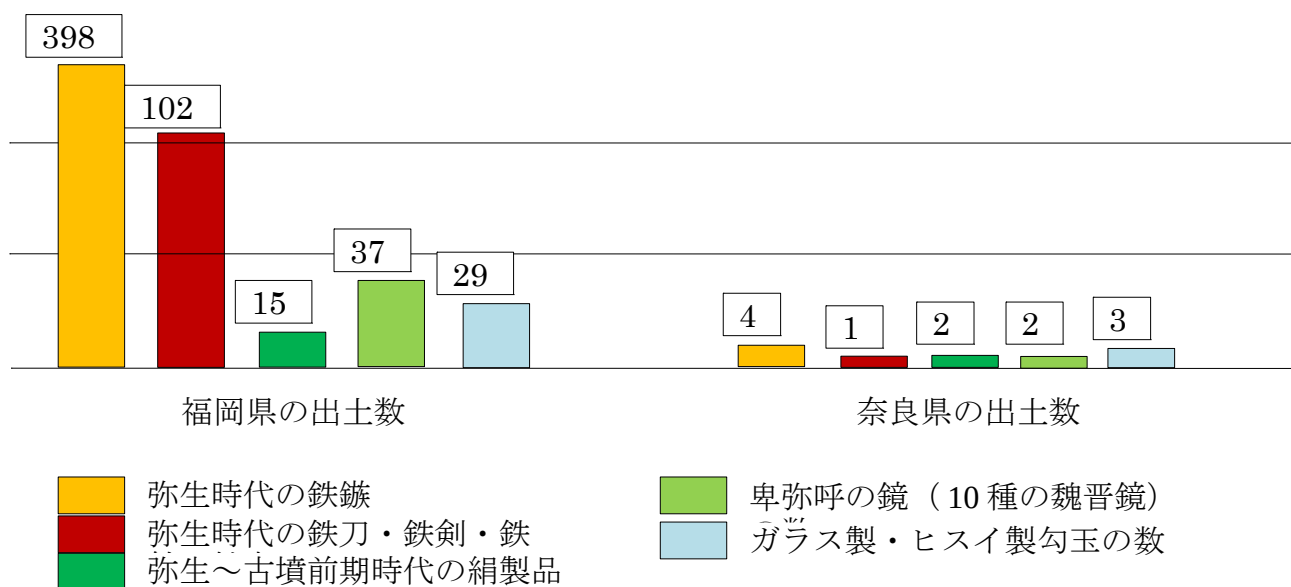
・資料編

①畿内説の魏志倭人伝の解釈・・・渡邊義浩（早稲田大学教授）

・倭人伝の背後にある古代中国の世界観・・・倭はこうであるはずだと世界観に基づきこうあってほしいという願望や先入観をもって陳寿たちは倭を見ていた。こうした記述はフィクションであり史実や実際の地理的条件に照らして正確ではないのは当然のこと。

・伊都国に、一大率という役人を置いたという記述があり、この大率は中国の刺史のようだと書かれています。刺史とは前漢に設けられた官職で、のちには州知事を指すようになります。刺史は首都圏には置きません。中国の洲はとても広く九州の北半分ぐらいある。そこに刺史がいたということは、逆に言えば邪馬台国はないということになるのです。邪馬台国が九州にあるならば、首都圏にあたる伊都国に置かれた大率を刺史と表現するのは不自然です。伊都国にいた大率を刺史と重ねたのは、伊都国が首都圏ではないから。つまり、邪馬台国が九州にあったという可能性は考えられません。

②福岡県と奈良県の出土遺物比較・・・邪馬台国畿内説徹底批判「勉誠出版:安本美典」



③九州説の魏志倭人伝の解釈・古賀達也（古田史学の会代表）

- ・邪馬臺国ではなく「邪馬壹国（やまい）」だった。

魏志倭人伝の現在版本には、例外なく「邪馬壹国」あるいは「邪馬国」と記されていますが、この「壹」は「イ」と読みます。ところが多い歴史学者は「この「壹」という字は誤りで、本当は「臺（台）」だった」という説を主張しています。しかし元々のデータを改ざんして自説に有利な説にしようとするのは、明らかなルール違反「研究不正」です。理系の研究論文でこれと同じことをしたら即アウトです。邪馬臺国説を唱えるのは、イ「壹」よりもタイ「臺（台）」のほうが何となく「ヤマト」に近いからです。たしかに奈良盆地には政権が築かれ、現在の日本につながっています。だからと言って国名を改ざんして「タマタイ国」が「ヤマト国」になったとするのは強引だと思います。

- ・女王国の中心部は、博多湾岸にあった。

魏志倭人伝に出てくる「里」が短里なのか長里なのかですが、長里（435メートル）では、5220 キロメートルとなり短里（一里 76 メートル）では、912 キロメートルとなって博多湾岸付近に到着することとなります。

- ・そもそも中国の歴史書というものは、皇帝に読ませるものですから内容がきちんとしていなければなりません。自説に都合が悪い記述があるとあれは間違だったとするのはいかなものかと思います。

- ・女王国が文字を使って（外交・政治をしていた）いたと思われる魏志倭人伝の記述があります。

“伝送の文書・賜遺の物、女王に詣る…”

“正始元年 …中略… 倭王、使に因って上表し、詔恩を答謝す。”

そうした文字文化の出土遺物が多いのは、北部九州や糸島博多湾岸（筑前中域）で、志賀島の金印や室見川の銘板、弥生時代の硯などが出土しています。

④魏志倭人伝

陳寿「三国志」魏書東夷伝倭人条

倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり、今、使譯通ずる所三十國。

郡より倭に至るには、海岸に循ひて水行し、韓國を歴るに乍ち南し乍ち東し、その北岸狗邪韓國に至る七千余里。

始めて一海を度る、千余里、対海國に至る。その大官を卑狗と曰い、副を卑奴母離と曰う。居る所絶島、方四百余里なる可し。土地は山険しく深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸有り。良田無く、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴す。

※ 対海國・・・中華書局標点本は現在の地名「対馬」と改竄している。

又、南、一海を度る、千余里、名づけて瀚海と曰う。

一大國に至る。官を亦卑狗と曰い、副を卑奴母離と曰う。方三百里なる可し。竹木叢林多く、三千許りの家有り。田地有り、田を耕せども猶食するに足らず、亦、南北に市糴す。

又、一海を度る、千余里、末盧國に至る。四千余戸有り。山海に浜うて居る。草木茂盛し、行くに前人を見ず。好んで魚鰕を捕え、水深浅と無く、皆沈没して之を取る。

東南陸行、五百里、伊都國に到る。官を爾支と曰い、副を泄謨觚・柄渠觚と曰う。千余戸有り。世に王有るも、皆女王國に統属す。郡の使の往来、常に駐まる所なり。

東南奴國に至ること百里。官をシ馬觚と曰い、副を卑奴母離と曰う。二萬余戸有り。

東行、不彌國に至ること百里。官を多模と曰い、副を卑奴母離と曰う。千余家有り。

南、投馬國に至ること、水行二十日。官を彌彌と曰い、副を彌彌那利と曰う。五萬余戸なる可し。

南、邪馬壹國に至る、女王の都する所、水行十日・陸行一月。官に伊支馬有り、次を彌馬升と曰い、次を彌馬獲支と曰い、次を奴佳テイと曰う。七萬余戸なる可し。

※ 水行十日・陸行一月・・・これは「郡からの全行程」である。

女王國自り以北、其の戸数・道里、得て略載すべし。其の余の旁國は遠絶にして得て詳らかにすべからず。

次に斯馬國有り。次に已百支國有り。次に伊邪國有り。次に郡支國有り。次に彌奴國有り。次に好古都國有り。次に不呼國有り。次に姐奴國有り。次に對蘇國あり。次に蘇奴國有り。次に呼邑國有り。次に華奴蘇奴國有り。次に鬼國有り。次に為吾國有り。次に鬼奴國有り。次に邪馬國有り。次に躬臣國有り。次に巴利國有り。次に支惟國有り。次に烏奴國有り。次に奴國有り。此れ女王の境界の尽くる所なり。

其の南、狗奴國有り。男子王為り。その官に狗古智卑狗有り。女王に属せず。

郡より女王國に至る、萬二千余里。

男子は大小と無く、皆黥面文身す。古自り以来、其の使中國に詣るや、皆自ら大夫と稱す。夏后小康の子、会稽に封ぜられ、斷髪文身、以て蛟龍の害を避けしむ。今、倭の水人、好んで沈没して、魚蛤を補え、文身し亦以て大魚・水禽を厭う。後稍以て飾りとなす。諸國の文身各異なり、或は左にし或は右にし、或は大に或は小に、尊卑差有り。其の道里を計るに、当に会稽東冶の東に在るべし。

※ 会稽東冶・・・ここを「後漢書」では「会稽東冶」と書き換えている。

その風俗は淫ならず。男子は皆露カイし、木繻を以て頭に招け、その衣は横幅、但結束して相連ね、略縫うこと無し。婦人は被髪屈カイし、衣を作ること単被の如く、其の中央を穿ち、頭を貫きて之を衣る。

禾稻・紵麻を種え、蚕桑・絹績し、細紵・ケン繻を出だす。其の地には牛・馬・虎・豹・羊・鵲無し。兵に矛・盾・木弓を用う。木弓は下を短く上を長くし、竹箭は或は鉄鏃、或は骨鏃なり。有無する所、タン耳・朱崖と同じ。

倭の地は温暖、冬夏生菜を食す。皆徒跣。屋室有り。父母兄弟、臥息處を異にす。朱丹を以て其の身体に塗る、中國の粉を用うるが如きなり。食飲にはヘン豆を用い、手食す。

其の死には棺有るも槨無く、土を封じて冢を作る。始め死するや停喪十余日、時に当たりて肉を食わず、喪主哭泣し、他人就いて歌舞飲酒す。已に葬れば、拳家水中に詣りて澡浴し、以て練沐の如くす。

其の行来・渡海、中國に詣るには、恒に一人をして頭を梳らず、キ蝨を去らず、衣服垢汚、肉を食わず、婦人を近づけず、喪人の如くせしむ。之を名づけて持衰と為す。若し行く者吉善なれば、共に其の生口・財物を顧し、若し疾病有り、暴害に遭えば便ち之を殺さんと欲す。其の持衰謹ます、と謂えばなり。

真珠・青玉を出す。其の山に丹有り。其の木にはダン・杼・豫樟・ホウ・櫪・投・僵・烏号・楓香有り。其の竹には篠・カン・桃支。薑・橘・椒・ジョウ荷あるも、以て滋味となすを知らず。ヒ猴・黒雉有り。

其の俗拳事行来に、云為する所有れば、輒ち骨を灼きて卜し、以て吉凶を占い、先ず卜する所を告ぐ。其の辞は令龜の法の如く、火タクを視て兆を占う。

其の会同・坐起には、父子男女別無し。人性酒を嗜む。（注：魏略に曰う「其の俗、正歳・四節を知らず。但春耕・秋収を計りて年紀と為す。」）大人の敬する所を見れば、但手を搏ち以て跪拜に当つ。其の人寿考、或は百年、或は八、九十年。其の俗、国の大人は皆四・五婦、下戸も或は二・三婦。婦人淫せず、妬忌せず、盜窃せず、諍訟少なし。其の法を犯すに、輕き者は其の妻子を没し、重き者は其の門戸及び宗族を没す。尊卑各差序有り、相臣服するに足る。租賦を収む。邸閭有り。國國市有り。有無を交易す。使大倭、之を監す。

※ 国の大人は皆四・五婦、下戸も或は二・三婦・・・「後漢書」はこれを初歩的に誤解して「女子多し」などと書いている。

女王國自り以北には、特に一大率を置き、檢察せしむ。諸國之を畏憚す。常に伊都國に治す。國中に於て刺史の如き有り。王の使を遣わして京都・帶方郡・諸韓國に詣らしめ、郡の倭國に使用するに及ぶや、皆津に臨みて搜露す。伝送の文書・賜遺の物、女王に詣るに、差錯するを得ざらしむ。

下戸、大人と道路に相逢えば、逡巡して草に入り、辞を伝え事を説くには、或は蹲り或は跪き、両手は地に抛り、之が恭敬を為す。対応の声を噫という。比するに然諾の如し。

其の國、本亦男子を以て王と為し、住まること七・八十年。倭國乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち一女子を共立して王と為す。名づけて卑弥呼と曰う。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婿無く、男弟有り、佐けて國を治む。王と為りしより以来、見る有る者少なく、婢千人を以て自ら侍せしむ。唯男子一人有り、飲食を給し、辞を伝え居処に出入す。宮室・樓觀・城柵、巖かに設け、常に人有り、兵を持して守衛す。

※ 倭國乱れ・・・「後漢書」は、その前の70～80年を乱れた年数と誤解して「倭国大乱」と書いている。

女王國の東、海を渡る、千余里、復た國有り、皆倭種。又、侏儒國有り。其の南に在り。人長三・四尺。女王を去る、四千余里。又、裸國・黒齒國有り。復た其の東南に在り。船行一年にして至る可し。倭地を參問するに、海中洲島の上に絶在し、或は絶え或は連なること、周施五千余里なる可し。

景初二年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし、郡に詣り、天子に詣りて朝獻せんことを求む。太守劉夏、吏を遣わし、將いて送りて京都に詣らしむ。

※ 景初二年・・・「梁書」に「景初三年」とあるのを優先させる論者が多いが、三年にしたほうが矛盾が多いのである。

其の年十二月、詔書して倭の女王に報じて曰く、

「親魏倭王卑弥呼に制詔す。帯方の太守劉夏、使を遣わし汝の大夫難升米・次使都市牛利を送り、汝献する所の男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈を奉じ、以て到る。汝が在る所遠きを踰え、乃ち使を遣わして貢獻せしむ。是れ汝の忠孝、我甚だ汝を哀れむ。今、汝を以て親魏倭王と為す。金印紫綬を仮し、装封して帯方太守に付して仮綬す。汝、其れ種人を綏撫し、勉めて孝順を為せ。汝が来使難升米・牛利、遠きを渉り、道路勤勞す。今、難升米を以て率善中郎將と為し、牛利を率善校尉と為し、銀印青綬を仮し、引見勞賜して遣わし還す。今、絳地交竜錦五匹（注：臣松之、以為らく、地は應に「糸へん十弟」と為すべし。・・・・中略・・・・魏朝の失に非ずんば、則ち伝写者の誤なり。）・絳地スウ栗ケイ十張・セン絳五十匹・紺青五十匹を以て、汝が献する所の貢直に答う。又、特に汝に紺地句文錦三匹・細班華ケイ五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠・鉛丹各五十斤を賜い、皆装封して難升米・牛利に付す。還り到らば録受し、悉く以て汝が國中の人に示し、國家汝を哀れむを知らしむべし。故に鄭重に汝に好物を賜うなり」と。

正始元年、太守弓遵、建中校尉梯儁等を遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭國に詣り、倭王に拝仮し、並びに詔を讀し、金帛・錦ケイ・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に因って上表し、詔恩を答謝す。

其の四年、倭王、復た使大夫伊声耆・掖邪狗等八人を遣わし、生口・倭錦・絳青ケン・絺衣・帛布・丹・木フ・短弓矢を上献す。掖邪狗等、率善中郎將の印綬を壹拝す。

其の六年、詔して倭の難升米に黄幢を賜い、郡に付して仮授せしむ。

其の八年、太守王基官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴國の男王卑弥弓呼と素より和せず。倭載・斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説かしむ。塞曹掾史張政等を遣わし、因りて詔書・黄幢を讀し、難升米に拝仮し、檄を為して之を告諭せしむ。

卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。径百余歩。徇葬する者、奴婢百余人。更に男王を立てしも、國中服せず。更相誅殺し、当時千余人を殺す。復た卑弥呼の宗女、壹与、年十三なるを立てて王と為し、國中遂に定まる。政等、檄を以て壹与を告諭す。壹与、倭の大夫率善中郎將掖邪狗等二十人を遣わし、政等を送りて還らしむ。因りて臺に詣り、男女生口三十人を献上し、白珠五千孔・青大勾珠二枚・異文雜錦二十匹を貢す。

あとがき

本文を書くにあたっては、最終ページに記載した資料を参考にさせていただきました。

・魏志倭人伝を解釈する前提条件を以下の通りとして考えました。

①中国の正史として、記述内容（方角及び里程・相手国名など）は信用できるとしました。

・当時（魏及び西晋の時）は、相手国までのルートや所要日数・里程などは軍事目的を考慮してか方角・里程が詳細で、その再現性が高い。何かあったときはすぐ相手国（倭国）へ行ける記載となっている。

②現在の弥生時代の考古学的出土遺物（漢式鏡・中国製の絹・三種の神器など）だけを見ても魏志倭人伝に書かれている品物については、他県と比べて福岡県それも糸島及び博多湾岸が圧倒的に多くそれだけでも、当時の王権があったことが指示されます。今回はあくまでも文献だけで考えました。

③魏志倭人伝の読み方はのポイントは、

・魏（中国）側から来た（使者）人が見た倭（日本）の姿であると考え。

・行ったところは、必ず「方角と里程及びどのように行ったか」

が書かれています。

具体的には「東南陸行、五百里、伊都国に到る」・「始めて一海を渡る、千余里対海国に至る」・「東行、不弥国に至ること百里」・・・など。

・ですから“東南奴國に至ること百里。”は、魏（中国）側から来た（使者）人は行っていないと考えました。

・部分里程の和は、“郡より女王國に至る、萬二千余里。”となること。



④里程を行くと、魏志倭人伝の最終目的地は、女王国ではなく。さらに、魏（中国）側から来た（使者）人は女王国の先四千余里まで行くのが目的だったことが分かります。さらにその先までも・・・以下に本文抜粋「女王國の東、海を渡る、千余里、復た國有り、皆倭種。又、侏儒國有り。其の南に在り。人長三・四尺。女王を去る、四千余里。又、裸國・黒齒國有り。復た其の東南に在り。船行一年にして至る可し」

⑤さらに「“其の八年、太守王キ官に到る・・・中略・・・塞曹掾史張政等を遣わし、因りて詔書・黄幢を齎し、難升米に拝仮し、檄を為して之を告諭せしむ。」とあってその直後に卑弥呼死亡の記載がある。「卑弥呼以て死す。大いに冢を作る。・・・以下略」

④は、太平洋の彼方に倭人の国が有る⑤は、張政等の仲裁もむなしく「狗奴國との戦いに敗れ」死んだ。とものとれます。

ともあれ倭人伝はとても具体的で同時代を記述した貴重な資料だと思います。

参考資料

- 倭国伝（20100913:中国正史に描かれた日本）、株式会社講談社、藤堂明保・竹田晃・影山輝因
 - 別冊宝島 2465（20160627:古代史再検証邪馬台国とは何か）、株式会社宝島社、瀧音能之
 - 図説 日本史通覧（20150225:図説 日本史通覧）、株式会社帝国書院、黒田日出男
 - 日本人になった祖先たち（20070225:DNAから解明するその多元的構造）、NHK出版、篠田謙一
 - 邪馬壹国の歴史学（20160330:邪馬台国論争を超えて）、ミネルバ書房、杉田啓三
 - 邪馬壹国はなかった（19800110:古田武彦説の崩壊）、新人物往来社、安本美典
 - 魏志倭人伝（19720728:魏志倭人伝）、株式会社講談社、山尾幸久
 - 卑弥呼の謎（19721024:卑弥呼の謎）、株式会社講談社、安本美典
 - 日本人の祖先（19750225:日本の歴史文庫①）、株式会社講談社、斉藤忠
 - エッセイで楽しむ日本の歴史 上（19970110:日本の歴史 上）株式会社文藝春秋、新井信
 - 魏晉（西晋）朝短里の資料批判（20100620:邪馬壹国の論理）、ミネルバ書房、杉田敬三
 - 国民の歴史（19991030:国民の歴史）、株式会社扶桑社、西尾幹二
 - 逆説の日本史（19980101:①古代黎明編）、株式会社小学館、井沢元彦
 - 古代史紙私注（19810920:古代史紙私注）、株式会社講談社、松本清張
 - まぼろしの邪馬臺国（19800120:新版まぼろしの邪馬臺国）、株式会社講談社、宮崎康平
- 以上。